

修證圓成之妙義豈容不習三藏教理俱迷  
罪若河沙之巨量妄道已證於菩提菩提是  
覺惑累皆云不生不滅号曰真常寧得同  
居苦海漫說我住西方常理欲希或淨為  
基誰囊穿之小隙慎針穴之大非大非之  
首衣食多咎奉佛教則解脫非遙慢尊  
言乃沉淪自久聊題行法略述先摸咸依  
聖檢豈曰情量幸無嫌於直說庶有益  
於疑途若不確言其進不誰復輒鑒於精  
魚

南海寄歸内法傳卷第一



なん かい き き ない ほう でん  
南 海 寄 歸 内 法 傳 (国 宝)

卷第一・卷第二

縦 26.2 cm 横 8.55m

奈良時代末期頃写

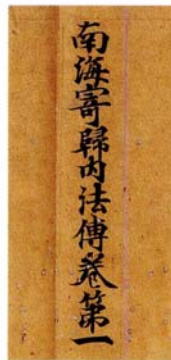
『南海寄帰内法傳』は、中国唐時代の僧義浄（六三五―七一三）の著。『大唐南海寄帰内法傳』、『南海寄帰旧傳』などともいう。書名は仏法（内法）を東南アジア（南海）から、中国へ帰る人に寄託し持つて帰ってもらった（寄帰）との意。義浄が「西遊記」で名高い玄奘（三蔵法師）の偉業にあこがれ、六七一（咸亨二）年、三十七歳のとき、広東から出港し、海路でシユリーヴィジャヤ（スマトラ島パレンバン）とベンガル湾を通って六七三（咸亨四）年に今のカルカッタから遠くない耽摩立底（タームラリプテイ）に

到着した。そこから仏教の聖地を巡礼の後、ナーランダ寺に十年間滞在し、多くの梵語（サンスクリット）経典を取経した。義浄は、ふたたびタムラリプテイから取経した経典をたずさえてスマトラ島まで戻り、経典翻訳のかたわら、仏教僧尼の實際生活、教団戒律や東南アジア諸国の仏教事情、地理、風俗など実地見聞を著わした。これが本書である。また本書は七世紀末の中国からインドへの海路記録になっているところに興味深いものがある。

『南海寄帰内法傳』は、『大正新修大藏経』に全四巻が収載

されるが、本館蔵本は巻一、巻二。その内「巻第一最初」と「巻第二最後」を欠く。しかし、現存最古の写本として貴重なうえ、優雅な運筆に柔軟にして和風の趣が残り、奈良朝末期から平安極初期の筆になる代表的な写経の一つ。昭和二十八年には国宝となった。仏教史だけでなく、東南アジア古代史の研究にも欠くことのできない貴重な資料で、天理図書館屈指の名品である。

（天理図書館 澤井勇治）



天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>  
 平日(午前9時～午後5時半) 土・日・祝(午前9時～午後4時半)  
 ただし12月21日、23日および27～31日は休み  
 (本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください)